ＫＯＢＥの本棚

－神戸ふるさと文庫だより－

第６７号　　平成２３年３月２０日
編集・発行　**神戸市立中央図書館**
〒650-0017神戸市中央区楠町７－２－１(078)371-3351

中央図書館２階神戸ふるさと文庫

神戸ふるさと文庫

平成二年四月、中央図書館に「神戸ふるさと文庫」が開設されました。「わが街神戸のルーツを探り、神戸っ子のアイデンティティを再発見する場」ということで、神戸の歴史や自然をはじめ、神戸を舞台とした小説、神戸ゆかりの人物の著作や伝記等、神戸に関わる様々な資料を収集しています。

文庫開設にあたって、市民参加による情報収集を行いました。ポスターやチラシ、新聞広告等で、文庫の資料や運営についてアイデアを募集、またアンケート調査も実施しました。集まった意見は資料収集に関するものが多く、全体の傾向として、親しみやすいものを、という希望が多く寄せられました。

提案を反映しながら利用しやすい本棚を検討し、「居留地」「源平合戦」「神戸空襲」といった問い合わせの多いテーマごとに資料を並べたコーナーを作っています。また、阪神・淡路大震災に関する資料を収集した震災関連資料コーナー「１・１７文庫」もあります。

さらなる充実を目指して、今年四月から、二十一年目に入ります。

観光ボランティアのおもてなし　山根晃二（風詠社）

「神戸ファンを増やすこと」「充実感を得ること」を目的に、著者は十年にわたり、神戸の観光ボランティア活動を続けてきた。案内客は四十万人を超える。本書は、その「おもてなし」の集大成として書かれた。

ボランティアの基本から実践に役立つ案内方法まで、わかりやすくまとめられ、ボランティアガイドを目指す人にとっても、頼りになる一冊になった。

ひょうごのいきもの・ふるさとを見守るなかま　兵庫県立人と自然の博物館ほか編・発行

二〇一〇年は、生物多様性年で、日本で「生物多様性条約会議」が開催された年でもある。生物多様性とは、生き物とそれにより成り立っている生態系などをさす概念。

本書は、兵庫県下の生物多様性に関わる団体を紹介したもの。取り上げられているのは、百団体余り。団体間の情報交換だけでなく、県下の生物多様性関連の活動を把握することができる資料ともなっている。

生田の森―神と人との出会い　加藤隆久（図書刊行会）

平成に入ってから機関紙、紀要に執筆された原稿、講演会や座談会の記録、祝辞等の文章を全八三二ページに収録する。目次には「生田薪能と神戸ビエンナーレ」「年頭所感―神戸と生田神社と酒造について」「『神戸まつり』生みの親小野富次さんを偲ぶ」「文明開化と神道文化」といった項目が並び、生田神社宮司であると同時に神戸女子大学名誉教授、神戸芸術文化会議議長などを兼ねる著者の多彩な肩書きを反映している。

一見、本の厚みに圧倒されそうだが、大半の文章は十ページ余に収められているので読みやすく、ページを重ねるにつれて著者、神道、生田の森、神戸の歴史が重層的に浮かびあがってくるだろう。

美味神戸ビーフの世界　神戸っ子出版編集部編・発行

県内で指定生産者が飼育した但馬牛のうち、歩留（ぶどまり）・肉質・霜降りの厳しい三条件をクリアしたものだけが神戸ビーフと認定される。

小柄でも屈強で従順な但馬牛だが、その血統を維持し、生産・肥育するために多くの人々の尽きない努力が注ぎ込まれている。

高価なため、頻繁には口にできない神戸ビーフだが、代表的な調理例も掲載され、読んでいるだけでも無性に食べたくなってくる。

神戸客船ものがたり　森隆行　五艘みどり（神戸新聞総合出版センター）

神戸は港と共に発展してきた。たとえば、神戸の発展の基礎となったマッチ産業は、神戸港という地の利と神戸に住む華僑のネットワーク、そして製品を輸送する船が一体となって育てたものだ。

この本は、明治の神戸開港から現在まで、それぞれの時代ごとに神戸港を出入りした船を主役にして、人や時代背景を描き出し、港と船の視点から神戸の文化の変遷をたどっている。

自立と支援の社会学―阪神大震災とボランティア　佐藤恵（東信堂）

本書は、阪神大震災によって「震災弱者」ともなった障害者とボランティア・ＮＰＯなどの支援者との「いっしょに支え合う活動」の実態を取り上げ、被災地障害者センターの活動現場等での「聞き取り」を基に、「コミュニティ」「市民の共感」「行政組織」といった第三者との関係をも含めることで、現実感のある社会学的な考察を展開した専門書。

ヴァルネラビリティ、ノーマライゼーションといったカタカナの専門用語が多数出てくるが、「聞き取り」の部分を見て行くだけでも充分考えさせられる。

現場での「聞き取り」には、当事者の語り口そのものの生々しい現実と、それに対する問題提起や実際の対応とが記録されている。

神戸市電と花電車　奥田英夫（神戸新聞総合出版センター）

全線廃止となって久しい神戸市電と「みなとの祭」の名物であった花電車の写真集。

本書には、著者が中学生のときから市電廃止までの十年間に撮影した約二〇〇〇枚もの写真のうち四〇〇点が掲載されている。

花電車のカラー写真はまとまって紹介されており、祭の日に沿線につめかけ、電飾を施した花電車を見た日を思い出す人もいるのではないだろうか。

「神戸の街並みと市電を撮影」「神戸っ子のハートを心に抱いて、市電を撮影」をモットーに、沿線の代表的な建物や風景と共に撮影されており、市電と共にあった市民の生活が垣間見えてくる。

二度寝で番茶　木皿泉　土橋とし子絵（双葉社）

神戸在住の著者は、夫婦で共同執筆を行う脚本家。二〇〇三年の「すいか」や近作「Ｑ10（キュート）」など、言葉にできない心模様をユーモラスに描き、多くのファンを持つ。

本書は、日常や時流について二人が交わす軽妙な会話を収めたエッセイだ。シンプルだが惰性に流れないコメントには不思議な安心感がある。誰にでも、心の引っかかりを好きなだけ考える自由があることを、思い出させてくれる。

神戸発新たな教育創造へ　神戸市小学校長会　神戸市立中学校長会編・発行

神戸の教育は、「神戸発」といえる取組が以前から多く実践されていた。平成十五年、各学校で創意工夫されていた取組を全市に広げようと「特色ある神戸の教育推進アクティブプラン」が策定され、平成二十一年には、さらなる発展・充実に向けて「神戸市教育振興基本計画」が策定された。

今まで語られることの少なかった神戸の教育活動の真髄に触れることができる一冊。

＝その他の新刊＝

おかんアート―兵庫・長田おかんアート案内　下町レトロに首っ丈の会編・発行

震度7を生き抜く―大震災から命を守るために　田代明美（時空出版）

森琴石作品集　熊田司　橋爪節也編（東方出版）

飴色の窓　野元正（編集工房ノア）

はれのち、ブーケ　瀧羽麻子（実業之日本社）

ページ先生の生涯―わが国時刻表の父　石本祐吉（石本出版）

書庫探訪　その㉓

『海瀬舟行図』　衣斐蓋子（えびがいし）　延宝8年（1680）

江戸幕府が作った航路図です。寛文7年（1667）、幕府は大坂船手頭を派遣して瀬戸内海、九州、四国、長門から陸奥の沿岸を調査しました。随行した衣斐蓋子がその時の資料をもとに航海に必要な情報を記入して作成したのが本図です。航路は赤い線で描かれ、海上距離・潮流・風向き・入港時の操船法などの事項が注記され、陸地には山河や海岸地域の城・町村・名所旧跡などが描かれています。上、中、下巻、「対馬・壱岐・五嶋」、「東北海瀬図」の五帖からなる折本で、たたんだ大きさは28.9×18.2㎝。

複雑な海岸線を正確に表すため紙を貼り足したり、方向を転ずる部分は直角に紙をつないだりする工夫がなされており、広げると形の面白さにも目が惹かれます。

中央図書館では、平成21年度に全巻のデジタル化を行い、館内の「貴重資料デジタルアーカイブズ」でご覧いただくことができます。

ランダム・ウォーク・イン・コウベ㊼

人力車で有馬へ

古い町並みの観光地などで見かける人力車。欧米文化が流れこんできた明治期に誕生し、やがては海外へも広まった明治日本を代表する発明品です。『神戸開港三十年史』によると、神戸に人力車が現れたのは明治三年六月で「駕籠米と云ふ者、大阪より一輛を借來り、三宮にて挽き初め」たといいます。台数が少ない頃は珍重されて、乗客はくじを引いて乗っていました。翌年に八十台余りに増え、明治三十四年には市内に四千四百六十五台。後年、鉄道や自動車におされて姿を消していくまで、交通の主流でした。

人力車の客待ち停車場のことを「帳場」といい、かつては市内各所にありました。とりわけ有名なのが「三角帳場」で、場所は三宮の東門街を北上し山手幹線へ出る手前、市電「中山手一丁目」の停留所近くでした。『生田神社―神道史研究』には、明治四十年の三角帳場の思い出が記されています。「木造三角形の二階建の家で、一階を土間にして、三方から出はいりが出来、いつも五、六台の人力車が常駐」して「いなせなハッピ腹かけ、ももひきに、わらじばきの車夫が客待に将棋板を楽しんでいたり、冬の寒い夜には提灯を股にはさんで、股火をしていた」。川西英の版画集『神戸百景』には、帳場廃業後、昭和十年の理髪店時代の姿が、画題は「三角帳場」のまま描かれています。

明治期に日本を訪れた外国人たちにとって、人力車は日本の名物であり、なくてはならぬ交通手段でした。港に上陸した後、まずは人力車でホテルへ向かいます。武文彦の『桃源自叙画伝』にはメリケンパークの車夫たちが描かれ、彼らの英語は「スラング極まるのだが仲々よく通じ」たとしています。外国人たちの旅行記に、人力車はたびたび登場。馬や牛でなく人間が車を引くことに最初は違和感を覚えながらも、車夫の頑健さに驚き、また頼りにもして日本での暮らしや観光に利用していく様子が窺えます。

地理学者で文学博士のエリザ・R・シドモアは、著書“Jinrikisya Days in Japan”（邦題『シドモア日本紀行』）で、明治十七年から約二十年の間に訪れた日本各地の様子を紹介しています。神戸滞在の折に、彼女は「空飛ぶ肘掛け椅子、この可愛らしい専用の私的玉座」である、人力車に乗って有馬へ行っています。

「有馬は神戸から一五マイル［二四キロ］ほど奥まったところにあり（略）午前六時、夏の朝露と新鮮な大気の中を出発」しました。

有馬へ向かうルートは、古来より使われていた西宮の生瀬を通る道、「魚屋道」とも呼ばれる深江から六甲山を越える道、三田からの道、そして兵庫区の平野から天王谷を通る「天王越え」の道があります。「天王越え」は道幅が狭く、川を飛び石伝いに渡るため非常に危険でした。県は石井村と有野村の両村長に託して二十二町村の協力で工事にあたらせ、明治七年に車馬や人力車も通れる道が完成しました。元々は、有馬に通じる街道を「有馬街道」と呼びますが、今日では、平野からの道を「有馬街道」と呼ぶことが一般的になっています。シドモアが通ったのは、おそらく「神戸近郊を抜けると次第に登り」になる、この有馬街道でしょう。「渓流に沿っていた道が未開拓の山峡へ入り込み、再びエメラルドの稲穂がそよぐ谷あいに出て」、やがて人力車は有馬へ到着。時代はくだりますが大正四年発行の『摂北温泉誌』には、有馬まで「神戸より五里廿七町、人力車賃金壹圓参拾銭なり」としています。

シドモアは有馬村を徒歩で探訪し、たくさんの竹細工を目にしました。有馬の竹細工は、秀吉の時代に千利休好みで籠が作られたのが始めで、明治三年に有馬の商人達が外国商人に売り込みを開始。明治二十七年の『有馬温泉誌』によると、籠職は約四十戸、年に約二十万個を生産していました。シドモアの他にも多くの外国人が有馬を訪れ、竹細工を求めています。アリス・メアリー・レイもその一人で、明治十五年、世界一周旅行で来神。ヒョーゴ・ホテルから人力車に乗り四時間、天王越えから有馬へ入り、竹細工を買いました。

有馬街道を人力車で走る、というのは現在では考えにくいことですが、時速約六～七キロで街道の坂を登っていく様子を想像すると、人力車が信頼に足る交通手段であり、文明開化以後の人々の行動範囲を確実に広げたと、実感することができます。

参考図書
『有馬の名宝』（神戸市立博物館）
『世界漫遊家たちのニッポン』（横浜開港資料普及協会）　ほか

神戸市広報印刷物登録　平成22年度第141-3
（広報印刷物規格　B-1）